

第 11 回例会（長善寺、竹鶴酒造見学）報告

広島大学マスタース会員 金田 晋

8月31日快晴。見学会参加者13名（広大マスタース会員：池上晋、井上宣邦、小方厚、岡本敏一、金田晋、黒川正流、菅川健二、難波平人、原野昇、平田敏文、山本禎紀；広大マスタース広島会員：渡辺一雄、長尾真理子）。JR山陽本線西条駅前に定刻の12時に12名が集合、会員の乗用車4台に分乗、出発。13時前に最初の見学先浄土真宗本願寺派日照山長善寺に到着した。同寺は竹原市郊外賀茂川沿いにある。小高い丘を背にして、小さな集落に守られるのどかな風景である。境内はよく整備されていて広い。長尾さんはここで私たちに合流した。

1) 長善寺見学。13時本堂にあがる。第20代住職大内亮文師から一向一揆の魂を今に伝えるこの寺の「縁起」をうかがった。長年の踏査で得た識見をもとに蘊蓄をこめた40分の講話であった。別室に席を移し、寺宝2点を前に、大阪石山寺合戦に臨んだ老将藤原忠左衛門に焦点を当てた解説がつづいた。

その寺宝とは、「進者往生極楽、退者無間地獄」と大書されたタテ88センチ、ヨコ66センチの麻製の旗ざしと翌年尼崎砦で討死にした19名の檀家の法名簿である。この2点は、おそらくこの国の歴史において最初で最後と言って過言でない、民衆の力が裸形で突出した一向一揆「石山農民戦争」(大内住職の言)の貴重な証しである。血に染められた旗ざしのちょうど「獄」にあたる場所に大きなほころびがあった。

少し説明を加える。今から400年以上前の1570年代、一向宗徒(門徒)と織田信長軍の間に、「一揆」と歴史ではよばれる農民戦争が、加賀、三河、長島等各地で凄惨なかたちで行われた。大阪石山本願寺もまた織田軍に包囲され、兵糧攻めを受けて、戦場であった。宗主顕如は西国の毛利方とすべての門徒に救援の檄を發した。その要請にこたえ、毛利、村上水軍それに門徒衆は協働して大阪に攻め上り、織田軍を撃破して10万石の兵糧を寺内に見事に届けた。長善寺も三世円生が檄にこたえて、檀家藤原



忠左衛門を頭に頼んで、村上水軍に加わった。忠左衛門はかつて同寺北部にあったと推測され、今では地名さえ残していない上野村篠原城を守る武士であり、檀家の中の稀少の戦闘経験者であったのだろう。かれは同寺開基善恵とかつて義兄弟の契りを交わした仲であり、その後善恵が出家したのに対し自らは大三島口総に土地を得て、既に50年の農民生活を送っていた。おそらく80歳を越えていたはずである。円生の願いを受けて、兵を集めて舟を出した。舟の舳先には決死の覚悟をこめて、「進者往生極楽、退者無間地獄」と大書された旗ざしが掲げられていた。目的は見事に成就され、兵糧は届けられた。だがその翌年、忠左衛門は一党を率いて尼崎砦で全員討死にする。法名簿には忠左衛門

の法名円心を先頭に 19 名の死亡した宗徒の名が 2 段で列挙され、「読経焼香」して供養するよう依頼の一文が下間按察使頼 署名で添えられていた。

長善寺は当時旧山陽道に近く西野にあったが、関が原の戦いのあと、広島藩主に移封された福島正則の軍勢に進軍の途次焼尽破壊され、同寺の檀家も賊徒として 5 軒、10 軒と散りじりに逃げ延びるしかなかった。寺自身も場所を移し、また数度の火災に会いながら、明治初期に現在地東野に落ち着いて、今に至る。その間、この遺品は寺宝として守り伝えられてきた。その歴史を貫く意志に、私たちは深く心を打たれた。14 時 30 分寺を出る。

2) 竹鶴酒造見学。第二の見学先は竹鶴酒造であった。竹原市街並み保存地区の道の駅に駐車、15 時前に竹鶴酒造に到着。私たちは、ここで、酒造りをめぐる現代の戦いの現場に立ち会った。同酒造の杜氏石川達也氏の生酏(きもと)による酒造りは、工業製品になってしまった明治以降の近代醸造に対する果敢な挑戦である。日本を代表する美術雑誌「芸術新潮」今年 6 月号に、塗師赤木明登氏が「なぜ今生酏(きもと)なのか」という特別寄稿を寄せ、石川杜氏の酒造りの挑戦を、共感をこめて私たちに伝えている。

15 時、「日本酒業界の大魔神」ともよばれる巨漢石川達也氏が私たちを迎えてくれた。早速、酒蔵内を酒造りの工程にそって案内していただき、私たちの質問にも丁寧に答えられながら、その建築上の配慮や工夫、酒造工程での役割を詳しく解説していただいた。今後は、今日では陶製や金属製になっている仕込み桶を、杉材の巨大な木桶に取り替えてゆくという。その木桶の意味を、参加者からの質問をいっぱい受けながら、石川杜氏は説明してくれた。そのあと、竹鶴酒造の歴史を伝える資料やお酒の並んでいる展示室(「小笹屋」)に集まって、竹原の町の歴史や文化としての酒の話題など、いろいろ多方面の話をうかがいながら、見学をしめた。

石川杜氏のモットーは「放し飼いの酒造り」。酒造りを江戸時代の伝統的手法にもどすことである。石川杜氏の言葉を赤木寄稿文から引いてみる。「いまは技術でどんな酒でも思いどおり造ることができるけれど、個性的であるために、個性を目的とした酒ばかりが造られている。そんなうわべだけの個性は必要ないと思うんです。」



もう一つ、これは赤木氏が石川杜氏から聞いたことばをまとめた文章。「酒とは本来、米と麹(こうじ)と水だけを三つ巴にして造られるものであった。一切何も足さず、自然の力を最大限利用して醸される生酏には素材の本質的なものを引き出す隠された力があるのではないか。」

話を聞きながら、私たちはこれはたんなる酒の話ではない、人間の生き方、子どもたちへの教育への提言なのだと、思わず居住まいをただした。有意義な一日であった。

16 時 30 分、竹鶴酒造の前で、私たちは散会した。